



能舞台の設営「手軽、安全に」

崇城大の学生が、菊池市隈府の能舞台「菊池松囃子能場」(県指定重要文化財)の扉(側板)の開閉補助機を考案した。試作品を作り、改良を重ねて実用化を目指す。能場は江戸後期の建築物で、毎年秋に国指定重要文化財「菊池の松囃子」が奉納される。

菊池市「菊池松囃子能場」

崇城大生考案 扉の開閉補助機

能の舞台は、普段閉まっている扉を下から外開きに開けて大きな庇(ひさし)のようにして、つっかえ棒をセットするとできあがる。住民たちが人力で扉をはね上げて設営しているが、高齢化に伴い安全確保が難しいという。後継者不足も懸念されている。



人力で行われる能場の扉の開閉作業

＝菊池市(市提供)

市は能場の利活用を進めようと包括連携協定を結ぶ崇城大に開閉機の開発を依頼。これを受け、学生サークル「からくり研究会」の4人が研究を重ねてきた。

補助機は、脚立のような台に滑車やロープを巻き取る装置を取り付ける。建屋から3〜4メートル離れた場所に置き、手でハンドルを回し、扉の先端に取り付けたロープを巻き上げる仕組み。学生らは現地で開閉作業を手伝い、扉の重さを体感した。工学部機械工学科4年の西陽希さん(22)は「歴史的な文化財なので、手を加えられない難しさがあった。扉の強度も考慮し、手軽さや安全性を追求した」という。

学生らは9日に菊池市の江頭実市長に考案した開閉補助機を説明した。江頭市長は「巻く作業は高齢者でもできるのか」などと質問。「安心感のある頼もしい内容。少し改良を加えれば十分に実用に耐えられるのではないか」と話した。

(本田清悟)